

# 川田秀子

（平成二十八年四月号）

朝光がまつすぐに来る明るさがもうすぐに来る 春の韻きに  
風にまみれ鵜は梅の花を食す一瞬あをく匂ふ水の辺  
そつと包めば雛は灯りぬ掌の中に痛みをやうに翅をふるはせ  
対岸は目に見えねどもいつまでも届かぬ声の春の清冽  
永遠ならぬものとし生れし白き犬を神のごとくに抱き上げたり  
蒼穹に帆を張る冬の弦月を見上げてわれは静かに畏る  
喪ひし声の降り来るわが視野をはみ出す雨を遠く見てゐる  
在りし日の君が好みし梅の香のしづかに月日は流れつづけよ



## ●作者の言葉

歳を重ねるごとに生の悲喜  
が去来します。その生に深く  
拘わった者の命の滅びに遭遇  
してより深い喪失感の日々で

した。この一連は広義の挽歌  
であり、相聞であり、心象の  
中での擬人化として詠んだも  
のです。愛する者への哀惜の  
念、犬や猫鳥や草花、心羅万

象に限りない慈しみを覚えます。短歌とい  
う小さく深い器に永遠を盛った作品です。  
私の作品にお心を留めて下さいました、谷  
岡亜紀先生に心から御礼申し上げます。  
・膨れたり縮んだりする月からの散華であ  
らうか 一束の詩 川田秀子

## ●選者の言葉

巡り合わせもあるがこの一年間に私が複  
数回特選に選んだのは、清水あかね、佐佐  
木定綱、小川祐子、勝島靖夫、川田秀子、  
クリシユナ智子、桐谷文子の七人。私の選  
歌欄のこの一年の収穫と言えるだろう。こ  
の中から、四月号の特選一位、川田秀子作  
品を今年の年間選者賞とする。

川田作品は、「在りし日の君」への喪失  
感を基調低音としつつ、悲しみと光、明る  
さと痛み、予感と畏れとが不思議に交差す  
る。いわば時の流れの中に風景の形而上性  
を感覚した一連であり、「韻き」「声」が示  
す聴覚と、景の具象をとらえた視覚とが、  
この世の（生）の手触りを伝えつつ、その  
もう一つ向こう側へ、この世の外へと、遠  
く投げかける透徹した視線を感じさせる。